

種 別 有形文化財（彫刻）
名称及び員数 木造金剛力士像 2 軀
所 在 地 葛城市當麻 1263
所有者の住所 葛城市當麻 1263
氏名 當麻寺

法 量 像高 阿形像 339.0 cm（1丈1尺1寸）
吽形像 339.8 cm（1丈1尺2寸）

形 状 阿形
髻（もとどり）を結う（元結い紐1条、正面に元結飾）。頭髪毛筋彫り。顔を僅かに右に向け、瞋目、開口、上歯をあらわす。左手屈臂し、肘を外に張って金剛杵を執り、右手垂下して掌を下に五指を伸ばす。上半身裸形、天衣、裳（折返1段）を着し、腰を左に捻り、右足を踏み出して立つ。

吽形

閉口。顔を僅かに左に向け、左手屈臂し掌を前に五指を伸ばし、右手垂下し、金剛杵を執る。腰を右に捻り、右足を踏み出して立つ。

台座

方坐

品質・構造 ヒノキ材 寄木造 玉眼 泥地彩色

阿形

頭部は両目尻、耳前、耳後ろを通る線で、前後3列に各左右2材を矧ぎ、挿し頸とするか。軀部は左右とも肩上面から踵にいたる前後の2材の角材を根幹とし、正面3材、背面4材をはじめ、腰まわり、両足外側等に小材を多数矧ぎ寄せる。左手は肩、肘でそれぞれ2材を矧ぎ、右手は肩から手首まで2材で手首先を矧ぎ付ける。天衣は小材を多数矧ぎ付け、鉄線を添わせて補強する。背中と後壁の間に二本の鉄製支持棒を取り付け、像を支える。その他、詳細は不明。

表面は、布貼りの上、泥地彩色を施す。肉身肉色、頭髪茶、裳ベンガラ。目は黒目黒、金と黒で縁取る。

吽形

概ね阿形像に準じる。

台座

板材を箱型に組む。各側面1材、天材4材。

時代 江戸時代

修補・損傷等 阿形

髻元結い紐、右胸前より遊離する天衣、持物、各欠失。左足甲半ばより先、右足指先、表面の彩色、各後補。各部材の接合緩む。現状、蜂が開口部より進入して像内（頭部）に巣をつくり、口の周囲や右玉眼周囲を汚損する。像は後世、台座部材の緩みや離脱で傾いたため、足裏に材を補足し修正したものと見られる。

吽形

髻元結い紐、持物、腰以下の天衣遊離部、各欠失。玉眼、左足指先、表面の彩色、各後補。各部材の接合緩む。阿形像同様、像は後世、台座部材の緩みや離脱により傾いたため、足裏に材を補足し修正したものと見られるが、現状、足ホゾを失い、台座の天板を破損するため、像は自立困難で、背後の鉄製支持棒で支えるものと見られる。

銘記等 阿形像頭部内内剖面に墨書が認められるが、判読不能。頭部内に「山野長江修」と墨書した木札がある。

備考 仁王門は延享2年（1745）上棟。本像は、大阪仏師であった田中主水家に伝わる仏師系図に見える、「和州當麻寺山門二王 金剛（阿形）高福作 力士（吽形）保久作 長壺丈也」に該当するものと考えられる。同系図より、高福は明和3年（1766）没、保久は「當麻寺長貳尺五寸庚申」を造立したことが知られ、現在、これに該当すると思われる青面金剛像が伝わる。

寸法細目	本躰（単位はcm）	
	〈阿形〉	〈吽形〉
像高	339.0	339.8
髮際高	309.0	307.0
面長	57.7	57.4
面幅	37.1	35.6
面奥	51.0	47.6
耳張	47.5	52.2

腹	厚	54.8	59.0
足先開	(内)	105.2	88.4
足先開	(外)	136.8	130.5

台座

		〈阿形〉	〈吽形〉
幅		181.8	181.5
奥		121.1	120.5
高		24.0	24.0